

# 異世界へ誤召喚

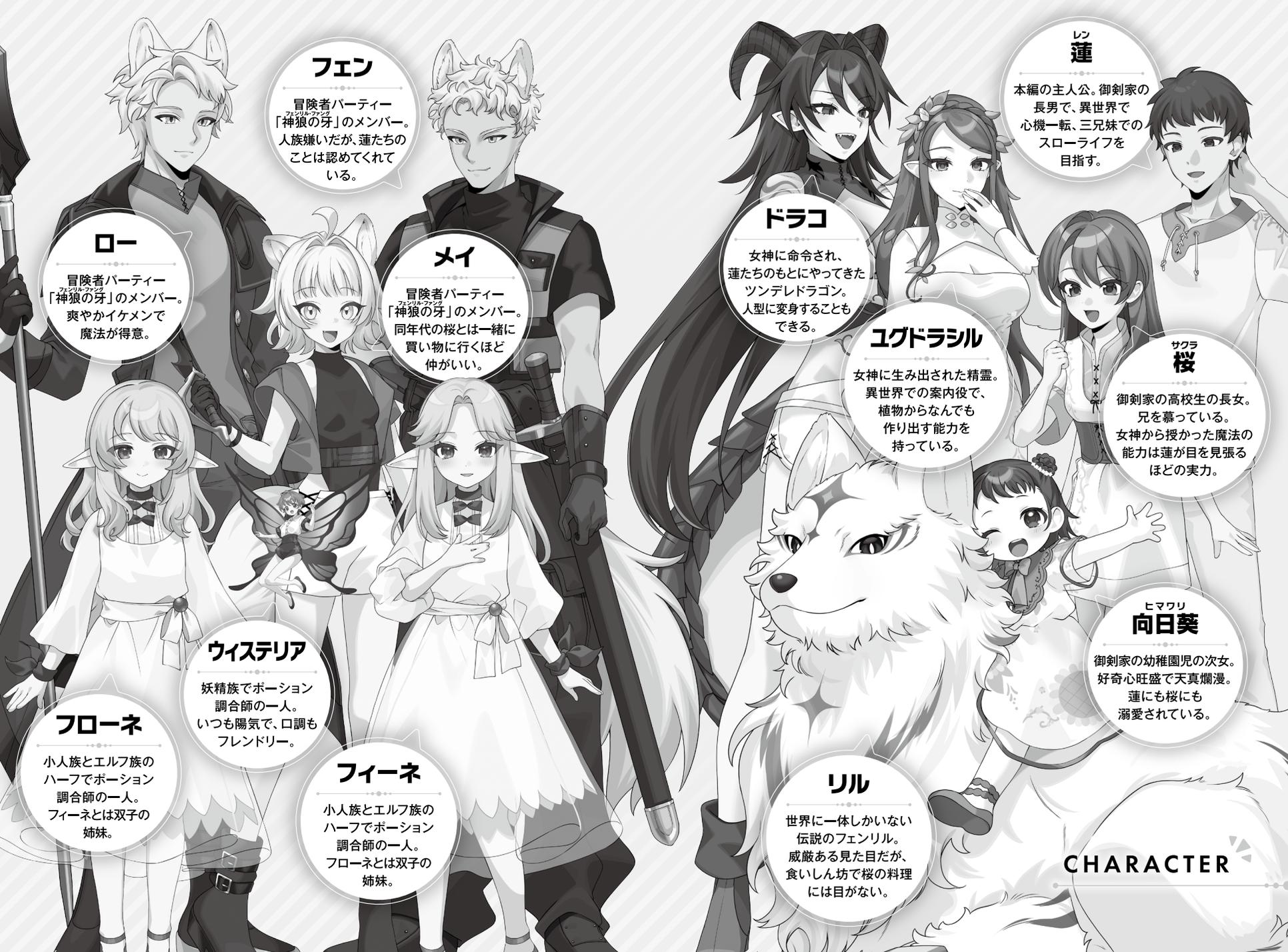
されちゃいました

2

女神の加護で  
ほのほの  
スローライフ  
送ります

著 モーリー





## フェン

冒険者パーティー「神狼の牙」のメンバー。人族嫌いだが、蓮たちのことは認めてくれている。

## ロー

冒険者パーティー「神狼の牙」のメンバー。爽やかイケメンで魔法が得意。

## メイ

冒険者パーティー「神狼の牙」のメンバー。同年代の桜とは一緒に買い物に行くほど仲がいい。

## ウイステリア

妖精族でポーション調合師の一人。いつも陽気で、口調もフレンドリー。

## フローネ

小人族とエルフ族のハーフでポーション調合師の一人。フィーネとは双子の姉妹。

## フィーネ

小人族とエルフ族のハーフでポーション調合師の一人。フローネとは双子の姉妹。

## レン

本編の主人公。御剣家の長男で、異世界で心機一転、三兄妹でのスローライフを目指す。

## ドラコ

女神に命令され、蓮たちのもとにやってきたツンデレドラゴン。人型に変身することもできる。

## ユグドラシル

女神に生み出された精霊。異世界での案内役で、植物からなんでも作り出す能力を持っている。

## サクラ

御剣家の高校生の長女。兄を慕っている。女神から授かった魔法の能力は蓮が目を見張るほどの実力。

## ヒマワリ

御剣家の幼稚園児の次女。好奇心旺盛で天真爛漫。蓮にも桜にも溺愛されている。

## リル

世界に一体しかいない伝説のフェンリル。威厳ある見た目だが、食いしん坊で桜の料理には目がない。

CHARACTER

## 第一章

俺——御劍蓮は飛行機事故で両親を亡くし、それから二十四歳になる現在まで桜と向日葵という二人の妹と支え合いながら過ごしていた。

高校二年生の桜は容姿端麗で頭脳明晰。

今年五歳になる向日葵——ひまちゃんは僕をいつも癒してくれる。

そんなこんなで、両親の残したお金を狙って連絡をしてくる親戚や世の中のブラックを寄せ集めたかのような勤め先にも耐えられていた。

ある日、気晴らしにピクニックでも行こうかと話していると、僕たち兄妹は光に包まれ、目を開けると見知らぬ白い空間にいた。

そこで、時空を司るといふ女神クロノスさんに告げられたのは、剣と魔法の異世界へ僕たちを誤召喚してしまったという事実。

僕たちはクロノスさんの深い謝罪を受けて、異世界への誤召喚を受け入れた。

やってきた異世界には、元いた世界では目にしたことがないほどに美しい大自然が広がっている。様々な女神様の加護により、僕は接近戦で、妹の桜は魔法戦で人類最強クラスになっていた。

ひまちゃんに至っては、超絶反撃性能のある自動障壁じどうしょうへきに守られ世界最強。さらに、女神様から守護者の役割を与えられた精霊ユグドラシルさんと神狼のリル、ドラゴンのドラコに助けてもらえてるおかげで、気楽な異世界スローライフを送っていた。そんなある日。

ユグドラシルさんと桜が農業で回復効果の高いリングとミカンを生み出した。

少しでも収入になればという桜の案で、果物をポーション化して街で売ること。

やってきたのは人間の街、グリーンデン。

人族やエルフ族、ドワーフ族や獣人族など様々な種族が生活を送っている。

数名の住人に果物ポーションを試しに飲んでもらったところ、味も回復効果も大好評。

果物ポーションの販売に向けて冒険者ギルドや商人ギルド、職人ギルドへの登録を経て、僕たちは商品化を進めることにした。

これから兄妹で力を合わせてポーション事業を軌道に乗せ、幸せ平穏な異世界スローライフを手に入れるぞ！

そう意気込みながら、僕たちは一度小腹を満たすために、桜が見つけたシュークリームのようなスイーツのお店に向かって街を歩き始めた。

みんなに案内してもらいやつてきたのは、街の北東側。

食品を取り扱う店舗が立ち並ぶ通り。

「さつきこのお店でパンを買ったんだよ。あつちは香辛料とか調味料とか色々置いてるお店なんだけど、だいぶ必要なものが揃ったんだあ」

桜は歩きながら僕と分かれていたときのことを嬉しそうに教えてくれた。

ギルドの登録は僕一人で行っていたから、その間に桜たちは買い物していたのだ。

「ねえ。リル。この辺りだよね？」

「うむ。ここを進めばあるぞ」

桜が店の場所をリルに聞くと、リルは尻尾を振りながら自信たっぷりに答えた。

「あれよ。間違いないわ」

ドラコがそう言って指差す先には、ケーキのような絵が描かれた看板の店舗があった。

皆よく覚えてるなあ。

リルに乗っていたひまちゃんは、お店がすぐそこだと聞いて、いても立ってもいられない様子でリルから降りて言う。

「ひいちゃんあるくー！」

「ふふふ。ヒマちゃん様。どうぞこちらへ」

それを聞いたユグドラシルさんは、微笑みながらリルの背に乗るひまちゃんに手を差し出し、受け止めるように抱き下ろした。

「みんなはやくー！」

ひまちゃんはリルから降りるとすぐに、お店に向かって走り出す。

「とうちゃーくー！」

「ヒマちゃん様は本当に足がお速いですね」

ユグドラシルさんは本当にひまちゃんに激甘げきかんだな。

「おじゃましますです」

ひまちゃんの言葉遣いは間違っている気もするけど、礼儀正しいことはいいいことだから、今は注意しないでおう。

ドアが小さくて入れないのでリルは店前で伏して待ち、僕たちはひまちゃんに続いて中に入った。「ん？ あら、いらつしゃい。可愛いお客さんが来てくれたもんだねえ」

店の中にいたのは人族のおばさん。

話し方には親近感があるが、見た目は日本人ではなく欧米人のようだ。

「甘い匂いに釣られて来ました。買ってもいいですか？」

「ええ、もちろん。うちのシューはグリーンデンー。いや、テルセニアが一番だよ」

おばさんはそう言いながら、受付横にある甘い香りがする丸い形のシューという菓子を指差した。

「ね？ シュークリームみたいでしょ？」

「ほ、本当だね」

桜に聞かれて答えたように、見た目は完全にシュークリームだ。

「おやお嬢さん。えらく詳しいね。今はもうその呼び方を知ってる人は少ないだろうに」

僕と桜の会話が聞こえたのか、おばさんは少し驚いたように言った。

ひよつとしてこのシューって……僕は気になり、おばさんに尋ねる。

「以前はシュークリームって呼ばれてたんですか？」

「そう言われていたのは二百年以上も前のことだよ。癒いよしの聖女せいじよアオイ様が世界にこの菓子を広めた当初は、そう呼ばれてたらしいけどね。今はもうみんな略りやくしてシューって呼んでるわよ」

そう言うとおばさんは「シュークリームなんて正式な呼び方を知ってるのは、私たちシュー職人くらいのもんさ」と続けた。

癒しの聖女か……アオイって名前だと多分日本人だよな。

彼女についてはあとでグランさんに聞いてみよう。

「ん？」

僕がふと視線を向けると、僕たちの会話がよく分からず興味もないひまちゃんは一人で「ひいちゃんはどうにしようかなあ」とシュー選びを始めていた。

腕組みをしながら片方の手を顎あごに当て、困ったような表情を浮かべている。

「それにしても可愛いお嬢さんだねえ。味はどれも一緒だよ」

ひまちゃんのパッシブスキルである愛嬌あいきょうLv10が炸裂せつれつしているのか、店のおばさんは優しくひまちゃんに教えてくれた。

「じゃあ。ひいちゃん、これとこれにしようかな」

味は一緒だというおばさんの声は聞こえていなかったのだろうか。

ひまちゃんは、あたかも違う味を選ぶかのように二つのシューを指差した。

「ひまちゃん。二個買った方がいいけど、夜ご飯前だから食べるのは一個にしておこうね」  
僕がそう言うと、ひまちゃんは少し残念そうに「はい」と返事をした。

「偉い偉い。残りは明日一緒に食べようね。という訳で私も二個買ったお」

桜も甘いものには目がないようで、ひまちゃんの真似をしてさりげなく二つ買うことを希望した。  
「もちろん私もだからね」

桜の言葉を聞いて、ドラコがすかさずそう口にした。

「分かってるよ。全員二個ずつにしておくね。お姉さん。十二個もらうていいですか？」

僕が店のおばさんにそう言うと、彼女は「あらあら。お姉さんだなんて。若いのお上手だねえ」と言いながら上機嫌じょうけんで紙の袋にシューを入れ始めた。

「ん？ あんた今十二個って言ったかい？ 二個ずつなら六個だろ？」

「え？ いいえ？」

おばさんは数量が間違っていると思ったのか、数を質たしたが、僕は正しい数を言っていたので、それを否定する。

「あ、外に友人を待たせてるんですよ。お気遣いありがとうございます」

すると、桜が割って入って説明してくれた。

「そうかいそうかい。そしたら二つの袋に六個ずつ入れておくね。お代は十個分にしようてあげよう」

おばさんはお姉さんと呼ばれたことが嬉しかったのか、笑顔でお代をサービスしてくれた。

一個大鉄貨一枚って書いてるから、十個で大銅貨一枚かな。

日本円で言うといけない五千円くらいか。

「ちょうどだね。毎度あり。でもこれだけの量だから一気に食べちゃだめだよ」

僕が大銅貨一枚を手渡すと、おばさんはそれを受け取り、食べすぎないように気にかけてくれた。  
お金の計算が合ってたよかった。

「ありがとうございます」

僕たちは買い物を終えて外に出た。

「にいに！ どこでたべる!？」

外に出るとひまちゃんが目を輝かせながら話しかけてきた。

「冒険者ギルドに戻りながら食べようか。リルもお待たせ。行こう」

僕はひまちゃんに返事をしてから、店の前で待っていたリルに声をかける。

冒険者ギルドで魔物の素材を買い取ってもらったときに、ギルドマスターのグランさんに無理を言つて、概算で先にお金を受け取ったので、いくらもある残金を受け取りに行く途中だったのだ。

「はむ……サクサクサク……あまあまうまうまー!」

リルに乗って美味しそうにシューを頬張るひまちゃん。

リルの背中には、ひまちゃんがこぼしたシューの欠片かけらがたくさん落ちている。

「ここら。ひまちゃん。お行儀が悪いよ……」

ひまちゃんを注意する僕のそばではドラコと桜が話している。

「なかなかいけるわね」

「ほんと！ すっごく美味しい！」

二人の口にも合ったみたいだな。

ユグドラシルさんも美味しそうに食べている。

「ちゃんと美味しいシュークリームだね。リル。そんなに見てもあげないよ」

一口で食べてしまい、物足りなさそうに僕のシュークリームを狙い見ているリルに僕は言った。

「あ、桜。そういえば、なんであの店員さんはシューの数を六個と言ったんだろ？」

「ごめん。蓮兄れんにいに言うの忘れてた。私たちだけで買い物しているときからずっと、ユグドラシルさんが、目立つのを防ぐために認識を阻害そがいする結界魔法むじまほうを使ってくれているの。だからお店の人には私と蓮兄とひまちゃんしかいないように見えてたの」

なるほど、どうりで店のおばさんがユグドラシルさんやドラコについて聞かないどころか、視線すら向けなかったわけだ。

「なるほど。それで数の認識の差が生まれたのか。ひよっとして、認識阻害で対応できるのって視覚と聴覚ですか？」

「はい。おっしゃる通りです。聴覚に関しては音の大きさによりますが、先ほどのような話し声程度であれば聞こえないようにすることは可能です」

僕が聞くとユグドラシルさんが教えてくれた。

「それにしてもお店の人、優しかったね」

桜は、店のおばさんがひまちゃんに優しかったこととサービスしてくれたことに好印象を覚えたようだ。

僕はその言葉を聞いて「この世界で差別を受けている獣人族に、どんな態度をとるのか気になるけどね」という言葉を飲み込んで、ただ「そうだね……」とだけ返した。

「にいに！ ねえね！ みてみて！ おしろ！」

シュークリームを食べ終わり、冒険者ギルドに向かっていると、ひまちゃんに声をかけられた。

そこにはお城というよりも、石造りで神殿のような装飾の少し古い建物があった。

「なんだろう。あの建物に呼ばれている気がする」

「え、蓮兄も？ 実は私も。見た瞬間に呼ばれた気がした」

どうやら僕の思い過あやまり過ぎじゃなさそうだな。

僕たちは気になり、神殿らしき建物へと近づいた。

「神聖な建物だね……女神様を祀まつっているのかな？」

僕がそう言うと、桜がステンドグラスの模様に気がつき教えてくれた。

「そうかも。ほら。ステンドグラスに女神様みたいなのが描かれている。でもクロノスさんっぽくないね」

ステンドグラスを指してユグドラシルさんが言う。

「そうですね。人間が用意した神殿かと。おそらくあそこに描かれているのは創造神ぞうぞうしんエマーテル様だと思われます」

「どうやら神殿で間違いないようだ。」

「ねえ桜、ひまちゃん。入ってみようか」

中に人がいたら聖女について聞けるかもしれない。

何より呼ばれた感じがしたのがすごく気になる。

「私もなんだか入ってみた方がいい気がする」

「ひいちゃんもいく！」

入り口はかなり大きく作られていて、リルでも入れそうだ。

巨人族と人族のハーフのハンデルさんを見たあとだから分かるのは、色々な種族が入れるように造られているということ。

「警備員とかはいないんだね。開けてみようか」

大きな扉を開けると、中央には真っ直ぐに敷かれた赤い絨毯。

両脇には十人掛け程度の長椅子。

正面に向かって少し歩けば内陣と主祭壇。

主祭壇には、女神を模したような七つの石像が飾られていた。

外から見たステンドグラスを通して光が差し込むことで、建物の中は神々しく彩られている。

「きれえ」

「きれー！」

桜とひまちゃんがそう声に出した。

「ひまちゃん。少しだけ小さな声でお話ししようね」

静まり返った空間ではひまちゃんの声がよく通る。

「誰もいないね」

「ひよっとして集会とかが終わったあとなのかな。ん？　ねえ桜。あれってクロノスさんに似てない？」

僕が指差したのは七つの石像のうち、真ん中の向かって一つ右側。

「わ！　ほんとだ！　すごく似てる！」

「えんえんしてたこ？」

どうやらあれは、クロノスさんの石像で間違いなさそうだ。

クロノスさんは僕たち三人をこの世界に間違っって召喚した張本人。

そのときに僕らに対して謝罪しながら泣いていたのだ。それにしても、ひまちゃんに泣いていた子として覚えられているのは、女神としてどうなんだろう。

「中央が創造神エマーテル様。その両隣が時空神クロノス様と運命神フォルトゥナ様。そのさらに両隣が戦闘神アレス様と魔法神マーリン様。そして鍛冶神へパイストス様と料理神フローラ様です」

「せっかくだしお祈りしていいこうか」

ユグドラシルさんがどれがどの女神様なのかを教えてくださいましたあと、僕はそうした方がいい気がして祈ることにした。

普通は内陣で跪ひざまずくんだろうけど……ひまちゃんを跪かせたくないな。

誰もいないし、座ってお祈りしちゃう。

小さい子供がいるんだから形式を崩しても大丈夫だろ。

「ひまちゃん。桜。ここに座ってお祈りしてみよう」

「私共も失礼いたします。どうぞ皆様はお掛けください」

ユグドラシルさんがそう言うてくれたので、僕は長椅子に並んで座り、ユグドラシルさんとドラコは僕らの前で跪き、リルは僕らの座る長椅子の横に伏した。

「いのる？」

桜には通じるが、ひまちゃんに祈りを説明することは難しい。

願いごとをしたり、仏壇ぶつだんに手を合わせたりすることはあったが、神への祈りを教えたことはない。

「えっと……泣いていたお姉さんに気持ちを伝えるって言うのかな。なんて言うかなあ……」

「よし！ すう……がんばれえー！」

僕が説明の仕方を考えていると、ひまちゃんは大きく息を吸い込んでから、手をメガホンのようにしてクロノスさんの石像目がけて声援を送った。

合ってるんだけど間違ってる。

普通は感謝とか誓ちかいと色々な思いを込めるんだけど、ひまちゃんの中のクロノスさんは「泣いていた子」という位置づけだから応援してあげたんだろう。

「とりあえず、おめめ瞑つむって、心の中でもう一度言うてごらん」

「がんばれえ……なむなむ……がんばれえ」

僕の言葉を聞いたひまちゃんは、応援を口にしたがら様子始めてしまった。

両親の仏壇に手を合わせたのを思い出したのだろう。

い、今は形だけでいいか。

ゆくゆく教えていこう。

僕たちは目を瞑って祈りを捧げた。

「ん？ ここって」

「あれ？ 蓮兄」

「ひいちゃんも！」

目を開けると見覚えのある白い空間にいた。

転移される前にいたあの空間だ。

「あれ？ ユグドラシルさん。ドラコにリルも」

桜とひまちゃんだけじゃなく、先ほどの並びのままにみんながいた。

「ふふふ。ご一緒させていただきます」

僕の前にいたユグドラシルさんは、振り返ってそう言った。

「皆様。ご無沙汰しております」

聞き覚えのある声だ。

僕たちが振り返るとそこにはクロノスさんと、石像の女神様にそっくりな女性たちが並んでいた。

「お久しぶりで……」

僕がクロノスさんの言葉に答えようとした瞬間。

「はあヒマワリ様！ やっとお会いできましたね！」

僕の言葉を遮り、一人の女神様がひまちゃんに駆け寄って、そのまま抱きしめた。

「く、くるしい……」

女神様の豊かな胸に顔が濡れ、ひまちゃんが息苦しそうだ。

「こ、これは失礼しました」

そう言っただけで女神様は抱っこを止めた。

「ぜ、全然放そうとしないね」

桜の言葉を聞いて、僕はあることに気がついた。

それはその場にいる誰もその女神様の行動を止めに入らないということだ。

「あの……ひよつとして、創造神様ですか？」

「はい。初めまして。創造神にして、女神たちの統括をしております。エマーテルと申します。こ

の度は時空神クロノスが大変なご迷惑をお掛けし、申し訳ございませんでした」

やっぱり創造神様だったんだ。

どうりで誰も止めないし、ひまちゃんにデレデレだと思った。

明らかに規格外。

控えめに言っただけでチートオブチートの加護をひまちゃんに授けた創造神エマーテル様。

加護通り、いやそれ以上の溺愛っぷりだ。

そして、全然ひまちゃんから離れない。

「転移後のサポートがしっかりしてましたので、もうクロノスさんには怒ってませんよ。元の世界よりも気楽に生活できてるので、少し感謝してるくらいです」

僕は、エマーテル様の鉄壁の加護のおかげで数多の不安が消し飛んだと感謝の言葉を続けた。

「あ、すみません。後ろの女神様たちにも話してもいいですか？」

「あ！ 私も！ 私もどうしても伝えたいことがあるの！」

僕がエマーテル様に断りを入れると、桜も勢いよく続いた。

「え、ええ。構いませんが……」

「ありがとうございます！ 料理神フローラ様はどなたですか!?!」

エマーテル様の言葉を遮り、僕と桜は同時に、どの女神が料理神フローラ様なのかを尋ねた。

僕と桜の勢いに押され、エマーテル様は半身になって「あの端にいる桃色の髪の……」と説明を

口にする。

しかし、その言葉を最後まで聞くことなく、僕と桜はフローラ様のところに駆け寄った。

「僕は蓮と言います！ 料理神フローラ様ですね！ 本当にありがとうございます！」

「妹の桜です！ ずっとお礼を言いたかったんです！ ありがとうございます！」

「え？ ええ？ 私は何も……」

感謝を拒むフローラ様に僕と桜は、フローラ様が生み出してくれたユグドラシルさんがどれほど

優秀で、どれほど助けられたのかを語りに語った。

そして、フローラ様に一通りの感謝を伝え、僕と桜はそばにいた他の女神様にも挨拶して、感謝を伝えることにした。

「戦闘神アレス様と鍛冶神へパイストス様ですよ？ 加護をいただきありがとうございます。おかげでなんとか生き抜いています」

戦闘神アレス様は炎のような赤い短髪で、胸や膝にだけ鎧をつけた女戦士のような恰好をしてる。

「おう！ レン！ 神界から見てたぞ！ あのドラゴンをぶっ飛ばすとはやるじゃねえか！」

アレス様は見た目通り男勝りな話し方だな。

神界というのは、女神たちが住んでいる世界のことだろうか。

そこから、僕がドラコに一撃を与えたのを見ていたようだ。

見た目通りにガサツな話し方だが嫌な感じはしない。

僕は「加護のおかげです」と答えた。

鍛冶神へパイストス様は茶色い髪で上半身は露出が多く、下半身は革のつなぎのような恰好をしている。

「へパイストス様もありがとうございます。素材の入手率を上げていただいているおかげで、お金にも困らずに生活できています」

「私の加護の本領はこれだからだな。自分で武器や防具を作るときが来たら、きつと驚くだろう」  
それにしても両女神ともに露出が多く、出るところが出ているため、目のやり場に困る。

もう少し隠してほしいが、上着を渡そうにも二人分はない。

どうしたものか……

「ははは。おもしれえ奴だな！」

「ふん。まったくだな」

僕がそんなことを考えていると、心を読んだアレス様とへパイストス様は顔を見合わせ、そして笑った。

「すみません。決して下心があったわけでは……」

「そうじゃねえよ。俺らを人扱いして普通に話ができる奴は初めてだと思つてな」

「ああ。それに氣遣われるなど初めてだ。気に入ったぞ」

僕が慌てて説明しようとする、アレス様はそれを否定し、へパイストス様は同意を示した。  
女神様たちには心が読まれてるってことを忘れてた。

でも不愉快な思いをさせていないのであればよかったな。

「魔法神マーリン様ですよ。本当にありがとうございます」

桜は長い黒髪で、法衣を身につけた女神様に感謝を伝えていた。

「ええ。焦らずゆっくりと学んでください。すでに人間でサクラ様に敵う者などいませんから」

魔法神から人間以上の存在だとお墨付きを得たことに、桜は喜んでいいのか分からず複雑な表情を浮かべて「はい」と答えた。

「お料理も無理なさらずに、楽しんでくださいね」

料理神フローラは桜に優しく語りかけた。

そしてもう一人。

瑠璃色の髪と瞳の、白いドレスの女神様がいる。

「あなたが運命神フォルトウナ様ですか？」

僕が尋ねると運命神様はお淑やかに頷いた。

「お陰様で、今のところ嫌な目に遭わずに済んでいます。ありがとうございます」

幸運値が高いこともさることながら加護の良縁のおかげで、今のところひまちゃんが周りの人に恵まれていることに僕は感謝を伝えた。

「私は少し手を添えただけ。ほとんどヒマワリ様の持つて生まれたものです」

本当なのか謙遜なのか。

フォルトウナ様は優しく微笑みながら言葉にした。

「急な招きに応じていただき、ありがとうございます」

挨拶が一通り済んだことを確認し、創造神エマーテル様が話し始めた。

相変わらずひまちゃんはエマーテル様に抱っこされたままだ。

「本当はクロノスと共に、初めのあの空間で謝罪しなければならなかったのですが……加護の準備を優先したため立ち合えず、申し訳ありませんでした。それと、この世界に適應する能力については、言語理解程度しか盛り込めなかったことを合わせてお詫び申し上げます」

エマーテル様によると、転生であれば加護に加えて肉体も再構築して、この世界の常識を完全に

理解した状態で送り出せたらしい。しかし、今回は転移だったため脳への負荷を懸念し、言語理解程度しか適應するための能力を盛り込めなかったそうだ。

「いえいえ。僕たちも偏見なく少しずつ世界を知れますし、先ほどもお伝えしましたが充分感謝しています」

知りたくもない世界情勢などを知った上でこの世界に来るよりも遥かにいい。

僕は再度、元いた世界よりも楽しめていることをエマーテル様に伝えた。

「クロノスさんももう気にしないでね。鑑定とアイテムボックスにはすぐ助けられています」

「あ、ありがとうございます」

桜がそう言うと、クロノスさんは涙ながらに感謝を口にした。

人間が気を遣い、女神が感謝するって不思議な構図だな。

「この場を設けるにあたって、ご両親からの想いを預かっております」

「えっ？」

エマーテル様の言葉に僕と桜は思わず驚きの声を上げる。

理解できないひまちゃんは「う？」と言い、首を傾げた。

「今回のクロノスの失敗を私から直接ご両親に謝罪をさせていただきます。とても心配されておりましたが、元の世界よりも幸せに過ごさせることを条件にお許しただけでした」

そうだ、クロノスさんは両親と間違つて僕たちをこの世界に召喚したんだっただけ。

そしてエマーテル様は「ご両親の魂をこの空間に連れてくるのができないので、私の力でお二

人の想いをそのまま預かってきました」と続けた。

次の瞬間。

僕の頭の中に両親の想いが流れ込んでくる。

『蓮。桜と向日葵を頼んだぞ。お前は要領が悪いんだから、機を逃さず結婚しろよ』  
久しぶりに聞く声で嬉しくはあるが……親父……殴りたい……

『蓮くん。全てを任せてしまつて本当にすみません。身体に気をつけて。ずっと見守っています。幸せになつてください』

僕は実の母親と同じように尊敬しているけど、本人は継母けいぼという立場を気にしているからか、申し訳ない気持ちが強いのだろうな。

「エマーテル様。母に、任せとけて伝えておいてください。あと、気に病まないようにと」

僕はそう思い、エマーテル様に伝言を依頼した。

「かしこまりました。お父様にも何か？」

エマーテル様の問いに僕が「何も言うことはないんですが、天罰つて下せますか？」と聞くと、  
「そ、それは致しかねます……」と困つたように返事をした。

『できかねます』ではなく『致しかねます』だから出来なくはないんだな。

「桜とひまちゃんもメッセージを受け取れた？」

「う、うん。頭の中に声が聞こえた。パパもママもずっと見守ってるからねって。あと、たくさん思い出を作つて幸せにならなさいって」

桜はそう言いながら流れる涙を手で拭つた。

おい、親父。扱いの差が酷くないか？

僕はその思いを口に出さずに「よかつたね」と桜に伝えた。

「エマーテル様。私からも両親に安心してつて伝えておいてください」

「かしこまりました」

桜の想いを汲み取り、エマーテル様は優しく微笑みながら返事をした。

「ひいちゃんも！ ばばとままがいた！ ひいちゃんだつこしてもらつてた！」

「え？ いたの？」

「ど、どういふことだろう？」

ひまちゃんの言葉が理解できず、僕と桜はエマーテル様を見た。

「ヒマワリ様には伝言に加え、産まれたときから離れるまでの思い出をいくつか抜粋ぼつすいして見ていただきます。その方がお二方がどれだけヒマワリ様を愛されていたかが伝わるだろうというご両親からのご提案です」

おい、親父。差がありすぎるだろ。

「ひまちゃんよかつたね。しっかり覚えておくんだよ」

僕がそう言うと、ひまちゃんはとても嬉しそうに返事をする。

「うん！ ばばとままね！ だんずきつていつてた！」

どうやら両親の思いはひまちゃんに適切に伝わったみたいだな。

「伝言は以上です」

「あ……そう……ですか。ありがとうございます」

僕はエマーテル様の言葉を聞いて、実母からの伝言がないことを残念に思ったが、今それを言う  
と雰囲気壊してしまうかもしれないと思い、感謝だけを伝えた。

「……こちらこそ、お会いできて嬉しかったです」

エマーテル様はそう言って僕にひまちゃんを渡したあと、ユグドラシルさんとリル、ドラコを見  
て「よろしく頼みますよ」と凜とした表情で言った。

「お任せください」

「御意」

「はっ！」

ユグドラシルさんに続いてリルとドラコが返事をした。

三者三様の返答だが、これほどかしまっているところを見るのは初めてだ。

とくにリルやドラコが緊張している姿など見たことがない。

「それとレン様。あなたが心配していることですが……全く気にせずお好きにしていただいて大丈  
夫です。サクラ様もヒマワリ様も、ご両親の想いの通り、自由に幸せに生きてください」

エマーテル様はなんでもお見通しなんだな。

僕がポーションによってこの世界に何かよくない影響を与えてしまいうんじやないかって気にして  
いたのを、察して言ってくれたんだろう。

「戻られたらサクラ様のカバンの中を見てください。それでは……皆様のこれからに大いなる祝  
福を」

エマーテル様の言葉に、僕たちは「ありがとうございます」と感謝を口にした。

そして、少しずつ意識が遠のき、目を開けると、ステンドグラスの光に彩られた神殿の中に戻っ  
ていた。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

これからの門出を祝うように時間を知らせる鐘が鳴り響く中、エマーテル様に言われた通り、桜  
が肩から掛けているカバンの中を見ると、家族五人が写っている写真が入っていた。

「わー！ おしゃしんだ！」

「桜。大切にしまっておいてくれる？」

「グス……うん。分かった……傷まないようにアイテムボックスに入れておくれ」

ひまちゃんが喜びの声をあげる中、僕が保管を頼むと、桜は涙を拭いながら答えた。

「さあ。いこうか」

ポーション販売に鉱石採取。

冒険に素材集めに、世界旅行。

やりたいと思ったことはどんどんやってみよう。

僕たちはこれから幸せいっぱい生きようと話しながら、神殿をあとにした。

「ふんふん♪ ふんふんふん♪」

ひまちゃんは神殿の外に出るとすぐにリルの背に乗り、鼻歌を歌っている。きつと家族写真が手に入ったことが嬉しいんだろうな。

「それにしてもエマーテル様は、加護通りにひまちゃんを溺愛してたね」

「うん。私も思った。ずっと抱っこして離さなかったもんね」

どうやら桜も僕と同じことを思っていたようだ。

僕たちは先ほどの空間での話をしながら夕焼けに染まる街を歩き、魔物の買い取り残金を受け取るために冒険者ギルドに戻ってきた。

「リル。少しだけ待っててね。くれぐれも暴れないように！」

「分かっておる」

冒険者ギルドの入り口は小さいため、リルには外で待機してもらった。

ウエスタンドアを押して中に入ると、建物の両端には二階に上がる階段。

中央には列ができており、獣人族やドワーフ族、エルフ族など数名が並んでいた。

列の先にはカウンターがあり、冒険者ギルドに勤めているウサ耳の獣人族のミミイさんが立っている。

そこから少し右に離れた所にあるカウンターには、同じく冒険者ギルドに勤めている犬のような垂れ耳の獣人族のソフィさんがいた。

グランさんは「帰ってきたら受付に言ってくれ」って言ってたけど、どっちに声をかければいいんだろう。

「蓮兄。今、獣人族の男性があそこの張り紙を剥がして受付に並んだよ。順番待ちみたいな張り紙なのかな？」

そう言っただけが指差す先には、複数の紙が張られている大きな木の板があった。

「いや、多分仕事の依頼書じゃないかな？ ああ張り紙を手にとって、この仕事を請け負いますって言いながら並んだんじゃないかな」

以前にプレイしたモンスターをハントするゲームで似たものを見たことがあったため、僕は憶測を伝えた。

「だとするとミミイさんの所が受付かもしれないね」

「僕たちも並んでみようか。あまり視線を向けられないようにね」

僕は桜に注意を促しながら、ひまちゃんと手を繋いだ。

僕たち人間の中で人族以外の種族である亜人から嫌われることが多い種族だ。

僕たちにとっては、この世界の種族を見慣れていないから、ついつい視線を向けてしまうのだけど、亜人たちからすると「人族がジロジロ見てきやがる」って怒りを買いかねない。

桜は僕の言葉の意味を察し、少し緊張した表情で頷いた。

しかし、僕たちの配慮も虚しく、列に並ぶために歩き出すと、すぐさま建物内の視線は僕たちを集まった。

「ね、ねえ。蓮兄。すごく視線を感じない？」

「そ、そうだね。子連れで来る場所じゃないからかな？ 僕たちもかなり幼く見えるみたいだし」  
でもなんでだろ。

みんなこつちを見ては目を逸らしていく……

僕が気になり後ろを見ると、ドラコが僕たちに向けられた視線をことごとく睨み返していた。

「ユグドラシルさん。ひよつとして結界魔法を解除しました？」

「はい。いらぬ問題を引き起こさないために、建物に入る前に解除しました」

僕が尋ねるとユグドラシルさんは優しい表情のまま答えてくれた。

逆じゃないのかな？

今こそ結界魔法で認識を阻害するときなんじゃないかな？

僕は先ほどのシユーの店と同じように、ユグドラシルさんが認識阻害の結界魔法を使ってくれていると思っていた。

だから僕は、この世界の人間と比べると冒険者ギルドに不釣り合いなくらいに幼く見える僕と桜、  
幼児のひまちゃんが入ってきたことで視線を集めたんだと思った。

どうやら理由はそれだけじゃないようだ。

新緑の葉でできた髪をなびかせ、豊満な胸元を見せながら歩くユグドラシルさん。

角つのと尾があり、長身で体も胸も大きく、整った顔立ちのドラコ。

これだけ個性的な集団であれば、視線を集めるのは仕方がない。

「ド、ドラコ？ 少し落ち着いて？」

僕らの方を見た人たちが怯えて目を逸らすのは可哀想だと思い、僕はドラコに声をかけた。

「このくらいやらないと舐められるじゃない。そのためにわざわざ認識阻害の結界魔法を使つてないんだから」

ドラコの言葉が気にかかり、僕が視線を向けると、ユグドラシルさんは肯定ことういするようにゆっくりと頷いた。

どうやらさつきユグドラシルさんが言った、「いらぬ問題を引き起こさないため」というのは、  
冒険者たちに絡まれるのを防ぐためという意味だったようだ。

「ま、まあこのくらいならいいか」

グリーンデンに入る門の前ではドラコが威圧しすぎたため、失神者が続出したが、今回は圧倒的な  
実力差を示す程度に睨みつけているだけ。

誰も倒れてないし、絡まれることもない。

「あ、レン様！ おかえりなさい！」

列の最後尾へと並び、僕が気まずさを感じていると、建物内にどよめきが生じたことで僕たちに  
気がついたミミイさんが声をかけてくれた。

「ソフィ。ここをお願いします。マスターを呼んでくるわ」

ミミイさんはそう言ってソフィさんに仕事を任せて奥の部屋に向かうと、すぐにグランさんとエ  
ルフ族の女性を連れて戻ってきた。

「おお！ 戻ったか！」

そしてグランさんは「お前たちが問題を起こさないか心配したぞ！」と笑って続けた。

その言葉に対して「僕も同じ気持ちでした」と答え、僕は横目でドラコを見た。

「おっとそうだ。先に渡しておく。残金だ。使いやすいうように金貨三枚と大銀貨六枚、それと銀貨十枚に分けてある」

グランさんはそう言うのと布袋を手渡してきた。

「お、おい。あいつらどんなクエストをやったんだ？ 金貨なんて普通は出ねえぞ」

「し、知らねえよ。俺、あんな風に袋に入れて受け取ったことなんてないぜ」

「残金ってことは、あれで全部じゃねえってことだぞ。とんでもねえ連中だな」

どよめきと同時に、周りの冒険者たちがひそひそと話す声が聞こえてきた。

どうやら通常は数枚の硬貨をそのまま手渡しでもらうようだ。

「あれ？ 少し多くないですか？」

たしかハンディルさんは僕が先ほど解体場に出した魔物を見て、大金貨一枚は下らないって言った。

これじゃあ全部足したらその倍の価値がある白金貨一枚を超えてしまう。

「いや、適切な金額だな。グリフォンから火魔石ませきが出たんだ」

グランさんがそう言うのと、周囲ではさらに大きなどよめきが起こった。

「お、おい。聞いたか？ グリフォンって言ったぞ？」

「やっぱりあいつは普通じゃねえぜ」

そんな言葉が聞こえてきた。

「魔石ってなんですか？」

「冒険者ギルドが大災害級だいがいまくら以上と定めている魔物から稀まれに採れる、魔法の効果を宿やどしている特殊な石だ。魔石を使って作られた武器や防具などには、その魔石の効果が追加されるんだ」

僕が尋ねるとグランさんは丁寧に教えてくれた。

「分かりました。もらえるお金が多い分には助かるので、適切な金額なら遠慮なく受け取っておきます。グランさん。少し話したいことがあるんですが、このあとか明日にでも時間をもらえますか？」

僕がそう尋ねるとグランさんは「ああ。構わんぞ。早い方がよさそうだな。アニイ。後を頼んでいいか？」と振り返り、後ろにいたエルフ族の女性に声をかけた。

「はい。問題ありません」

「すまないな。何かあったら適当に対処しておいてくれ」と。

グランさんがそう言うのと、アニイと呼ばれたエルフ族の女性は、魔法の発動などに使われる魔素を揺らめかせ「お任せください」と返事をした。

「ついでに紹介しておく。さっき冒険者ギルドに来たときに名前だけは伝えていたな。エルフ族のアニイだ。受付兼副ギルドマスターをしてきている。くれぐれも怒らせるなよ」

「いらぬ情報を広めないでください」

グランさんがそう言うのと、アニイさんはすかさず指摘した。

きつとグランさんも幾度となく怒られてきたんだろうな。

「お前たちのことは説明しておいた。俺がいないときに何かあればアニイに言ってくれ」

「ありがとうございます。アニイさん。よろしくお願いします」

グランさんの言葉を聞いて僕がアニイさんに頭を下げると、アニイさんは笑顔で「こちらこそよろしく願います」と答えてくれた。

しっかりとそうな人だな。

「少し失礼します」

アニイさんは僕やグランさんに断りを入れてから、一步前に出て跪いた。

「精霊ユグドラシル様。エルフ族のアニイと申します。グリーンデンにお越しいただきありがとうございます。ごさいます。お目にかかれて光栄です」

「あなたは、ここでは上の立場の者なのでしよう。立ちなさい」

状況が分からず僕がグランさんを見ると、エルフ族は森の民とも呼ばれていて、植物を司る精霊のユグドラシルさんのことを、女神様と同じくらい崇拜しているのだと教えてくれた。

「あ、あの副ギルマスが跪いたぜ!？」

「精霊って言ってたぞ。噂は本当だったんだ。あいつらシルバーウルフみたいなかい魔物も連れてるらしいぜ」

「睨み返してくるデカイ女も、竜人族なのに尻尾があるぜ？ どうなってるんだ？」

どうしよう。

注目的どころの騒ぎじゃないな。

「うっっ。んん！」

僕が気まずそうにしているとグランさんは、あからさまな咳払いをして集まった注目を散らしてくれた。

そしてグランさんは「飯でも食いながら話そう。支度をしてくるから外で待っていてくれ」と言って、奥の部屋へと歩いていった。

「では、私は業務に戻ります」

アニイさんはそう言って会釈をしてから受付に入っていく。

「グランさんって気遣いもできるし、いい人だよね」

そう言う桜の表情は明るかった。

どうやらグランさんが気に入っているようだな。

彼の貫禄や大人びた風貌から、ひよっとしたら父親を思い出しているのかも。

「そうだね。さあ。外で待とうか」

僕たちは外に出てグランさんを待つことにした。

「待たせたな。こっちだ」

待っているとすぐにグランさんは冒険者ギルドから出てきて、道案内をしてくれた。

グランさんと一緒に歩いているから少し視線は向けられるけど、冒険者ギルドのときのように驚

きやどよめきはない。

きつとユグドラシルさんが結界魔法を使ってくれてるんだろうな。

「精霊様。それにリル殿にドラコ殿。窮屈きゆうくつな思いをさせて申し訳ない」

規格外の存在であるユグドラシルさんたちが、人間社会ならではの窮屈さやストレスを感じることの配慮も忘れない。

グランさんは本当にできる男だな。

その後、グランさんは桜やひまちゃんに対して「無事に買い物できたのか？」や「嫌なことや困ったことはなかったか？」と、まるで我が子と接するように話しかけてくれた。

「ここだ。ちょっと待っててくれ」

冒険者ギルドから十五分程度歩いた飲食街の裏路地で、グランさんが僕らに待つように指示して、店の中に入っていた。

見上げると、店の入り口の上には、肉球の前にスプーンとフォークが交差する絵が描かれた看板がある。

そして絵の下には、店名らしきものが書かれていた。

「小熊のしっぽ？ ふふふ。可愛い名前のお店だね」

「本当だね。肉球があるから、獣人族専用とか獣人族が営むお店とかって意味なのかな？」

桜と僕が話していると、中からグランさんと一緒に大柄の獣人族の男性が出てきた。

「そうだ。何か文句でもあるのか？」

そう言った熊のように黒い毛で覆われた丸い耳の獣人族の男性は、険しい表情で腕組みをしていて、いかにも機嫌が悪そうだ。

「おいおい。ベアード。説明しただろう」

グランさんがそう言っただけだと察すると「あ、ああ。すまなかった。ついな。俺はベアードだ」と熊耳の男性は態度を改めて挨拶してくれる。

一瞬ユグドラシルさんの魔素やリルとドラコの鬨気に乱れを感じてヒヤリとした。

ベアードさんがすぐに機嫌を直してくれて本当によかったな。

「僕はレンと言います。こっちは妹のサクラとヒマワリです。大人数おとなかずで急に来てすみません。ご迷惑じゃなかったでしょうか？」

「あ、ああ。問題は……ないっちゃないんだがな」

ベアードさんがこの店の主であることを察して、僕が謝罪すると、彼はそう言っただけで驚いた表情をしながらグランさんを見た。

「だから大丈夫だと言っただろ？ 入ってもいいよな」

グランさんが言うと、ベアードさんは戸惑いながら「あ、ああ……変わった奴らだな」と返事をした。

「ひまわりです。よんさいです。おなかすいています」

「ん？ そうか！ そうか！ それなら腹いっぱい食っていけ！ こっちだ！」

ひまちゃんがリルから降りて挨拶をすると、ベアードさんの表情は明るくなり、店の外壁に沿うように裏手に案内してくれた。

良縁と愛嬌Lv10の効果は絶大だな。

先導するベアードさんのお尻には、顔と身体には似つかわしくない、黒くて丸い可愛らしい尻尾があった。

見た目とのギャップが可愛くて僕は桜と顔を見合わせたけど、差別や馬鹿にしていると思われてはいけないため、言葉にはしなかった。

ベアードさんに案内された先にあつたのは、広い庭にあるテラス席。

庭には日中に光を溜めて、夜に光を放つ輝き草かがやこが植えられており、ぼんやりと光を放ち始めている。「ここなら揃って飯を食えるだろう。適当に運んできてやるからゆっくりしてな」

ベアードさんにそう言われ、僕はお礼を口にする。

「すみません。お気遣いありがとうございます」

大きさ的に店内へ入れないリルへの配慮と、人目のない場所を選んでくれたことを僕は嬉しく思った。

するとベアードさんは再び戸惑った表情を浮かべ、グランさんを見る。

視線を受けたグランさんが「な？ 問題ないだろう？」と言うと、ベアードさんは「あ、ああ」と答えた。

きゆるるる……

ひまちゃんのお腹の音が鳴り、グランさんとベアードさんは顔を見合わせた。

「がはは！ 元気なお嬢ちゃんだな！ 少しでも待ってな！」

そう言っ店の中に向かうベアードさんにグランさんは「ベアード！ 腹いっぱいにしてやってくれ！ この方々はとんでもなく食うからな！」と言ってリルとドラコを見た。

「ふむ。分かっておるではないか」

「そうね。ありったけ持ってきてもらいましょか」

リルもドラコもグランさんを悪く思っていない様子で、笑みを浮かべながら答えた。

グランさんは真つ直ぐで裏表がなく、親切で情に厚い。

顔が老けていなければ、主人公のお手本のような人物だ。

「おい。今、失礼なこと考えてなかったか？」

「そ、そそんなことないですよ！」

グランさんに心を見透みかされ、僕は慌てて否定した。

「ふん。まあいい。さて、食事が来る前に話を聞こうか」

グランさんはそう言うと言席につくように促し、僕に何があつたかを尋ねた。

「実は……」

僕は簡潔に、商人ギルドと職人ギルドに行ったときの出来事を話した。

二つのギルドへの登録は問題なくできたこと。

冒険者ギルドが商人ギルドの店舗販売コールドランを取得していれば、問題なく果物ポーションを供給できる

こと。

店舗販売とは、店を構えて商売をするために必要な資格だ。

そして、商人ギルドの横暴とも言える金額設定により、今売られているポーションは原価の十倍以上の金額になっている現状について話した。

「あのクソ商人め……おつとすまない。子供の前だったな」

グランさんは、商人ギルドのせいであれほど冒険者が苦しめられているかを一番知っている。だからこそ怒りを露わにしたんだろう。

「俺が店舗販売を取得してるからその点は問題ない。安心してくれ」

グランさんはすぐに感情を落ち着かせ、店舗販売を取得してることを教えてくれた。

それなら話が早く進みそうだ。

「僕はこのリンゴポーションとミカンポーションを、コップ一杯分で大銅貨一枚程度の値段にして冒険者に提供できるようにしたいと思っています」

果物ポーションは生命力も魔素量も闘気量も、たったコップ一杯でステータスが中回復——三千程度回復できる。

並の冒険者であれば、一杯で全回復するほどの一品。

それが、大銅貨一枚程度。日本でいえば五千円という価格設定。

現行の中級ポーションは一種類につき銀貨二枚程度。

闘気回復、魔素回復、生命力回復の三種類揃えば、銀貨六枚、つまり日本円で言うと六万円。

もし実現できれば、冒険者の負担は十二分の一になる。

「それだけ安価であれば、間違いなく冒険者の懐事情は助かるだろうな。とくに駆け出しの者ほど助かる」

グランさんは安心した様子でそう言った。

「かなり破格の値段なんですけど、よくない市場を変えたいと思って」

僕がそう言うと、グランさんは「本当に規格外な奴だな」と嬉しそうに答えた。

「そこで相談なんですけど、グランさんに、お金に溺れて悪いことをしないことを誓ってもらった上で、転売の防止策を考えてほしいんです」

「ああ。任せてくれ。そんなことはしないと約束しよう。問題は転売の管理だな。アニイたちにも相談してみるよ」

僕もグランさんが金で人間性が変わる人だとは思っていない。

微かな不安をなくすために言ったただけだ。

「よろしく願います。あと、現行のポーションの売れ行きが悪くなると、三人の調合師さんが職を失うそうなので、面談をして問題なければ僕たちが雇うことにしました。一応情報を共有しておきますね」

僕がそう言ってユグドラシルさんを見ると、ユグドラシルさんは少し嬉しそうな表情で頷いた。

「雇うって……まさか精霊様の森に入ることか？ 前代未聞だぞ……」

グランさんはそう言って驚いている。

「三人には森で働いてもらうことになりですね。あとは販売開始予定時期ですが、十日後くらいでどうですか？ ポーションは僕たちが今度街に来るときに持ってきます」

僕がそう言うと、グランさんは「分かった。それくらい時間があれば、準備できるだろう」と答えた。

「リルとドラコ。僕たちが忙しくしていたら、今まで通りひまちゃんといっぱい遊んであげてほしい」

僕がそう言うとリルとドラコは頷き、すぐに快諾かいたくしてくれた。

しかし、先ほどは嬉しそうな顔をしていたユグドラシルさんが暗い表情になって黙っている。

「ど、どうかされましたか？」

僕が尋ねると、しばしの沈黙のあと、ユグドラシルさんは口を開いた。

「どうしても納得できないことがあります」

やはり、未だに精霊の森への人間の立ち入りは許可できないのだろうか。

その昔、ユグドラシルさんは人間たちの横暴な態度に腹を立てて精霊の森への人間の立ち入りを禁じた。

はたまた、僕たち以外の人間への果物の供給自体を断るのだろうか。

そうなれば、今までの話はなかったことになる。

ユグドラシルの意思を尊重しようと僕はユグドラシルさんの言葉を待った。

「そして、ずっと気になっていたことでもあります」

ひよっとしたら僕のがざつと気に入らなかつたのだろうか。

そうだとしたら、本当に申し訳ない。

「私だってヒマちゃん様と遊びたいんです。それをいつもいつも……」

ユグドラシルさんはそう言いながら恨めしそうに、ひまちゃんに毛を掴まれて体をよじ登られているリルを見た。

「我に言われてもな……」

僕は拍子抜けして、思わず体勢を崩してしまった。

それを見てユグドラシルさんが「どうされました？」と不思議そうに僕へ尋ねてきた。

「すみません。ユグドラシルさんがあまりにも深刻な表情をしていたので、他の答えを想像してました」

「深刻です！ この街に来てから、私はろくにヒマちゃん様を抱っこしていないんですよ！ 毎回、他の者ばかり！」

ユグドラシルさんはそう言うと、次は、ひまちゃんがよじ登りやすいようにお尻を支えているドラコを見た。

「わ、私に言われても……」

流石のリルやドラコも、ユグドラシルさんにはあまり強く言い返せないんだな。

これは単純な強さの問題ではなく、幼馴染のお姉さんには誰も逆らえない、あの感じだろう。

今までひまちゃんがリルの背中に乗るたびに微笑んでいたのは、苛立ちを隠す笑顔だったのかも



しれないな。

「ヒマワリ隊員！ 緊急ミッションだ！ こっちにきてくれ！」

「あい！」

僕が唐突に発した「ごっこ遊びのきつかけとなる言葉に対するひまちゃんの順応速度は速かった。掴んでいたリルの毛を手離して地面に下り、綺麗に着地のポーズを決めた。

アクションスターのように着地した雰囲気は出ているが、高さは三十センチメートル程度だ。

そして素早く僕の元に駆け寄り「ひいちゃんたいいん！ きました！」と敬礼をしながら返事した。

僕はそのままひまちゃんを抱き上げ、ユグドラシルさんの膝に乗せてから尋ねる。

「ひまちゃんは、ユグドラシルさん好き？」

「うん！ だいすき！ やさしくてねえ。つおくてねえ。あまいのくれるの！」

最後に食い意地が張った言葉が出てしまっているけど、そこはユグドラシルさんには聞こえていないようだ。

「はあ！ ヒマちゃん様あ！」

ユグドラシルさんはそう言いながら、栄養不足を補うように膝に乗るひまちゃんを抱き締めた。

しばらくそっとしておこう。

「今のうちに聞きたいんですけど、街で聖女って言葉を聞いたので、どんな人なのかを教えてくださいませんか？」

驚きながらユグドラシルさんを見ているグランさんに僕は質問する。

「ん？ あ、ああ。それは構わないが……これで大丈夫だったのか？」

「大丈夫です。きつと協力してくれますから。今はそつとしておきましょう」

僕が果物ポーシヨンの事業に影響は出ないことを説明すると、グランさんは癒しの聖女アオイについて教えてくれた。

「聖女と呼ばれていたのはアオイ・ミカドグニという女性でな。二百年以上前に現れた異界人だ。周囲の者の精神を癒し、欠損部すらも瞬時に回復させる強力な支援魔法を使う女性だったと聞いている」

漢字にしたら帝国葵みかぎとでも書くのだろうか。

タナカ・タロウという名前の勇者とは違って、いかにも主人公って感じの名前だ。

「それがどうかしたのか？」

そうグランさんに聞かれ、僕は瞬時に考えを巡らせた。

癒しの聖女。

ひまちゃんのパッシブスキルの『癒し』と同じ効果のスキルを持っていたのだろうか。

そのスキルを持っていたから聖女と崇められていたのであれば、ひまちゃんもそうなる可能性があるな。

僕はひまちゃんのスキルについては伏せておこうと思い、「シユーを広めたと聞いたので、この世界でどんな風に過ごしていたのか気になっただけです」と答えた。

「ふむ。この世界について知るいい機会だ。少し教えてやろう」

シユーを広めただけじゃなく、元々あった先ほどの神殿に孤児院こじいんを併設ひんせつしたこと。

世界中を旅してあらゆる怪我や病気を治療して回ったことなどをグランさんは教えてくれた。

「勇者さんの子孫がグランさんなら、聖女様のご子孫もどこかにいるんですか？」

話を聞いて桜が尋ねた。

するとグランさんは「いいや。聖女様はその生涯の全てを、人々の救済のために捧げられ、子孫は残していない。本当に偉大なお方だ」と答えた。

称えるように言うグランさんをよそに、僕はひまちゃんの加護やスキルを知られないようにした方がいいのかもしれないと思った。

「聖女様は幸せだったのかな……」

どうやら桜も僕と同じように聖女様を少し可哀想に思ったのか、呟くように言った。

「無理やりさせられたんじゃないやなくて、自分で決めてしたことなら、それはそれで一つの選択だからいいのかもしれないね」

僕は桜にそう言うってから「僕も桜とひまちゃんが決めたことならなんでも応援したいと思うけど……」と言葉を濁した。

「ああ。そうだな。俺にも娘がいる。聖女様のような人生を歩むことは素晴らしいことだと思うが、親として応援しきれるかと言われると難しいものがある」

グランさんはそう言いながらひまちゃんを見る。

「おーい！ 熱いのが通るぞお！」

なんとも言えない空気が流れる中、ベアードさんが美味しそうな香りのする料理を運んできてくれた。

「おお！ やつと来たか！ さあ冷める前にいただくでしょう！ ベアードの作る飯は本当に美味しいんだ！」

グランさんがそう言うのとベアードさんは「まだまだあるぞ！ ドンドン食いな！」と言って店の中を見る。

すると、店内にいた二人の猫耳の獣人族の若い女性が、料理を運んできた。

テーブルに並ぶ料理は、どれも香りだけで美味しいと分かる。

「果物ポーション販売の大枠は決まったので、詳細は明日に話し合います。職人ギルドのガバルさんとも、もう少し話したいですし」

「ああ。そうだな。さあ！ 食事にしよう！」

話し合いを終え、僕たちは輝き草の光に囲まれながら料理をいただくことにした。

ベアードさんの作ってくれた料理はどれも美味しく、あつという間に食べ終わってしまった。

「おててをあわせて！ ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした」

ひまちゃんの挨拶に合わせて、僕たちは手を合わせた。

「そういえば、食事の前にもそんなことをしていたな。それはなんだ？」

「これは食材を作ってくれた人への感謝を表すための挨拶です」

グランさんに聞かれて、僕が説明をすると、グランさんは僕らを真似て「ごちそうさまでした」と言い、ひまちゃんに「ヒマワリ。これで合ってるか？」と作法ができていたかを尋ねた。

「うん！ じょーず！」

ひまちゃんに褒められ、グランさんは嬉しそうな表情を浮かべている。

まるで娘を溺愛する父親のような表情だ。

「それにしても……本当にすげえ食ったな。精霊様たちに振舞うつてので気合入れて作りすぎちゃったつてのに……」

ベアードさんは山のように重ねられている空いた皿を見て驚いている。

「とても美味しかったです。ありがとうございます」

「俺たち獣人族に感謝するなんて……お、お前ら本当に人族か？」

僕の言葉にベアードさんが驚いていると、グランさんが「ははは！ うちでも、同じような会話があったぞ！」と言った。そして、僕たちがミニイさんが食器を運ぶのを手伝ったときのことを、ベアードさんに話し始める。

「りるう……」

グランさんたちと話していると、ひまちゃんが眠そうにリルに寄りかかった。

「眠るのか……ヒ、ヒマワリよ。今日はユグドラシルが寝かせてくれるそうだ」

## 立ち読みサンプル はここまで

それをいつものようにリルは受け入れかけたが、途中でユグドラシルさんの視線に気がつき拒んだ。

「ゆぐちゃん……」

「はあ。ヒマちゃん様。どうぞお眠りください」

ひまちゃんがふらふらと歩いて近寄ると、ユグドラシルさんは心の底から嬉しそうな表情を浮かべながら、ひまちゃんを抱き上げた。

「精霊様も、あれほど幸せそうな表情をするのだな……」

「あ、ああ。精霊様を敬っているエルフ族の奴らにこの姿を見せたら、ヒマワリのこと崇めだすだろうな」

グランさんとベアードさんは、驚きを隠せない様子だ。

「そういえば、お前ら宿はどうするんだ？」

グランさんに聞かれ、僕が「今から探します」と答えた。

「なら俺の経営する宿屋が近くにあるから部屋を用意しておいてやるよ。本来は獣人族限定だが、お前らは特別だ」

「ベアードさん、ありがとうございます。助かります」

ベアードさんの宿屋は部屋数も多く、広さの割に値段も安く、冒険者には特に人気だそうだ。

「俺はこれからギルドに戻る。ベアード。食事代と宿代は俺が払う。これで足りるか？」

グランさんは金貨一枚をベアードさんに渡した。

「ああ。問題ない。釣りを取ってくるから待っていてくれ。それと、宿の場所を描いた紙を用意しよう」

ベアードさんはそう言うのと店の中に入っていった。

「何から何まですみません。ありがとうございます」

「気にするな。ゆつくり休むといい。明日、職人ギルドでの話が終わったら、冒険者ギルドに来てくれ」

僕が感謝を伝えると、グランさんは戻ってきたベアードさんからお釣りを受け取った。

「じゃあ、また明日な」

店を出ようとするグランさんに桜とひまちゃんが挨拶をする。

「グランさん、ありがとうございます」

「ぐらんのおじさん……またねえ……」

ひまちゃんはユグドラシルさんに抱かれて今にも寝てしまいそうだ。

「おじさんじゃないぞ！ グランのお兄さんと言うように！ ははは！ 二人とも夜更かしせず寝るんだぞ！」

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

グランさんはそう言って四度目の鐘が鳴る中、冒険者ギルドに戻っていった。

「グランの奴、えらく上機嫌だな。まあいい。これが地凶だ」

「ありがとうございます」